

漢詩人としての阪口五峰 —清詩との関わり—

田 春 娟

Abstract

The poetic style of the Chinese poems of Sakaguchi Gohō(1859-1923) is said to have changed between before his getting to know the Chinese poems of the Qing Dynasty and after that. In this paper I consider what kind of contact there was between Gohō and Qing poetry: the "Xing Ling" poetry group, Zhang Chuanshan, s poetry, etc. I choose poems in *Gohō Ikō* which concern Qing poetry and examine what kind of influence Sakaguchi Gohō had from it. As a result, it becomes clear that Gohō got to know Qing Dynasty poetry through Yamanaka Kōun, a disciple of Mori Shuntō, and Mori Shuntō himself. Zhang Chuanshan was the most important person among the Qing poets whose poems influenced Sakaguchi Gohō.

キーワード……阪口五峰、漢詩人、森春濤、清詩、張船山

はじめに

坂口安吾の父・阪口五峰は漢詩人として知られているが、その詩作は清詩を知る以前と以後では傾向が変化したと言われている。本論文では、五峰の唯一の漢詩文集『五峰遺稿』にある漢詩の中から清詩との関係が明確な詩を選択し、五峰がいつ頃から清詩と接点を持ち、どのような影響をうけたのかを探りたい。

一、五峰と清詩との接点

まず、五峰と清詩の接点を考える。

江戸の享保年間から明治時代まで、清詩のアンソロジーは断続的に出版されていたが¹⁾、特に明治になってから清詩は漢詩壇において爆発的に流行した。神田喜一郎は、日本の江戸時代から大正時代まで清詩の流行について、次のように述べている。

江戸時代の末期から明治大正年代に至る約百年間における清詩の流行は、じつにすさまじいものがあつた。當時の漢詩人は、われいちに先を争つて清詩を読んだものである。李・杜・韓・白の詩は讀まなくても、厲樊榭だの黄仲則だの張船山だの陳碧城などといふものには、何をおいても飛びついた。²⁾

五峰の漢詩の師である森春濤も、明治一一（一八七八）年一月、『清廿四家詩』を出版し、また、同年一二月に、独自の編集による『清三家絶句』³を出していることから窺えるように、清詩の影響を強く受けた漢詩人の一人である。

今關天彭は、森春濤の詩は「香奩体と神韻派を一つにしたもの、清麗なる文辞、纏綿たる情緒、宛転たる音節に加ふるに清新なる感興があり、その間に俗情媚態の厭ふべきものがないとは云はぬが、何としても我国の有する一天才」⁴であると評している。香奩体とは、唐の韓偓の『香奩集』に始まる宮媛・閨女などを詠じた艶麗な詩風であって、このような艶体詩と清詩の神韻派の融合したものが春濤詩の特色であるとしているのである。揖斐高も春濤の詩風の特徴は艶体詩にあるとし、「春濤の詩風を特徴づける艶体の詩のなかで目立つのは、竹枝と香奩体」⁵であるとしている。竹枝は、「竹枝詞」「竹枝曲」「竹枝歌」とも言い、唐代の巴渝（今の四川省東部）一帯の民歌に始まる形式の詩である。内容は、多くが巴山、蜀水の自然や風景、風土や習俗、男女の恋情を歌ったもので、形式は七言四句、言葉は自然で素朴、風格は清新で婉曲である。晩唐・五代のころ、それが発展して「詞」となり、詞牌の一つとなった⁶。日本では近世後期、江湖詩社を結成した市河寛齋の『北里歌』、その門人である柏木如亭の『吉原詞』、菊池五山の『続吉原詞』『深川竹枝（水東竹枝詞）』などの詩集が盛んに詠じられた⁷。また揖斐高によれば、春濤の清詩との関係については、「日本では十八世紀後半に山本北山によって紹介喧伝され、

江戸後期の詩風に大きな影響を与えた」清の袁枚の性靈説は、「春濤の師星巖が所属した江湖詩社の詩人たちによって十九世紀の初頭に鼓吹され、春濤が活躍した幕末頃にはすでに一般化していた詩論」であるとし、春濤と性靈説との関係はあまり重要視する必要がなく、「春濤が先駆的に紹介し、春濤自身の詩を特色づけるものとして大きな影響を受けたのは、清の王漁洋⁸の神韻説の詩論であった」⁹と、今關と同様に、神韻派の影響を強調している。神韻派とは、清詩の流派の一つであり、言外の余韻を重んずる説を唱え、清の王士禎が主張した詩説である。唐の王維・孟浩然の詩風を受け、限られた言葉のなかに無限の情緒を求め、自然と「我」が混然一体となる詩境を理想とした。

このように、今關天彭や揖斐高によって、森春濤の詩は、詩風としての香奩体、形式としての竹枝、詩論としての神韻説を特徴とするとされているが、五峰と清詩の関係を考える場合、春濤と性靈派との関係を無視するわけにはいかない。春濤が編纂した『清三家絶句』は、神韻説の詩人ではなく、性靈詩派に近い詩人である張船山（一六五首）、陳碧城（二〇〇首）、郭頻伽（一七四首）の絶句を収録しているし、その「序」において巖谷一六は、「春濤翁、選清張船山・陳碧城・郭頻伽三家絶句、上梓。其詩雋妙雅麗、讀之可以發揮性靈也。曩者、江湖社諸老、首唱宋詩、有范・楊・陸三家刊本。海内靡然、詩風一變。今斯選行世、余知騷壇俊英有所嚮往而真性靈之詩出矣。（春濤翁、清の張船山・陳碧城・郭頻伽三家）の絶句を選び上梓す。其の詩は雋妙雅麗にして、之を読めば

以て性靈を發揮すべきなり。曩者、江湖社諸老、宋詩を首唱し、范・楊・陸三家の刊本有り。海内靡然として、詩風一変す。今斯の選の世に行はるれば、余、騷壇俊英の嚮往して真の性靈の詩の出づる所有るを知る。」と、この詩集によってむしろ性靈説が鼓吹されることを期待しているからである。

ほぼ年代順に編集されている『五峰遺稿』において、森春濤の来鴻以前の五峰の詩には、清詩と関連がある表現は見当たらない。『五峰遺稿』において初めて清詩と関わる詩は、春濤が新鴻を離れる時に作られた「送春濤先生東歸」と題する七言律詩の次に配置された明治一四（一八八一）年作の「歳暮雜感」と題する七言律詩四首連作の二首目の詩である。そこには、「談到性靈詩未眞（談性靈に到るも詩未だ真ならず）」という詩句が見られ、性靈説を春濤から教えられたものの、いまだ自分の詩においてそれを実現するに至っていないという自覚が示されている。また、清人の詩に和韻した漢詩には「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」三首（二五歳作）がある。その他、詩句や詩の自注や引などの中に清詩と関わりが明確に示されている漢詩は以下の通りである。

- ・「去秋春濤先生見贈新刻詩鈔近日又獲湖山樓詩集枕山詩鈔率題七律四首」四首中の三首目（二四歳作）。「徒摹格調氣應不能正性情詞乃葩」
- ・「消夏六詠用蔭山晚香韻」六首中の二首目（二五歳作）。「八體窮法則 萬卷資性靈」
- ・「和武者城川寒燈夜讀書屋原韵」六首中の三首目と五首目併せ

て二首（二五歳作）。イ、「奇才袁子才」ロ、「詩本不關學」

・「借忙吟 并引」（二六歳作）。「借病隨園意太奇」

・「還鄉卽事」九首中の七首目と九首目併せて二首（二八歳作）。

イ、「我亦爲呼小笛漁（自注に「笛漁小稿」云々とある。）」、

ロ、「不見朱家老釣師（自注に「謂朱朴堂也」云々とある。）」

・「北越詩話成作五絶句」五首中の五首目（六一歳作）。「工夫借

病借忙餘（自注に「袁子才有「借病」詩云々ある。）」

最後の詩を除き、他のすべては五峰二〇代の頃の詩作であり、森春濤を知って以後の作である。つまり、五峰は森春濤の弟子・山中耕雲や森春濤本人を通して清詩を知ったと推測することができる。

五峰の周辺の人物の証言によれば、五峰の清詩との関係は、明治一二年の春濤門下の山中耕雲との交友に始まると考えられる。山際操の回想談には、「明治十二年十月ごろ、加賀の金澤に新聞記者をしてゐる人で山中耕雲といふ春濤門下の詩人が新鴻へ漫遊して來ましたが、この人は五峰君が最初上京中に知り合つた間柄で、無論五峰君は眞つ先にこの人と新鴻に會した、そして自分をもよび迎へて三人一所に語りました。（中略）當時耕雲はわれくに對して詩を作るには從來のやうに李杜韓白もよろしいが清朝人の詩を見なければどうも村氣が去らないと思ふ、よろしく張船山などの作を見るべきだと勧めてゐたので、五峰君も自分も少からずこれに動かされるやうになつたのでした。」¹⁰とあり、この時、張船山を始めとする清詩が中央で流行していることを知ったと思わ

れる。このすぐ後、同年一二月には、春濤の主催する『新文詩』第五六集に、五峰の初めての艶体詩「友人の新瀉しんがに遊ぶを送る」と題する七言絶句が載せられることになる。そして、その二年後の明治一四（一八八一）年夏末ごろ、森春濤が新瀉に來遊し、およそ二ヶ月以上五峰の宅に滞在した。五峰の実弟で『新文詩』や『新瀉才人詩』にもその漢詩が載せられている詩人である南義二郎（註）によると、「阪口（五峰）の紹介で正を春濤に請ふもの履常に戸外に滿ち春濤一過、北越の詩は皆茉莉園派ならざるなしといふ有様で」あつた、とある。明治一四年一月の『新文詩』第七六集に載せられている五峰詩「山中耕雲見似病中書感詩盖次予近作韵也乃置原韵却寄（山中耕雲見て、病中書感詩を示さる。盖し予が近作の韵に次する也。乃ち原韵に置し、却つて、寄す）」と題する七言律詩一首（王士禎の神韻派のような詩作）について、小野湖山が「春濤一遊して、北地の詩風大いに變ず、諸子の唱和に於て之を觀る」という評を下しているところからも、五峰を初めとする新瀉の漢詩壇が森春濤から大きな影響を受け、その中に清詩の影響が含まれていたことが窺える。

清詩の五峰への影響の痕跡は、明治一五年一月の五峰の詩「去秋、春濤先生、新刻の『詩鈔』を贈らる。近日、又た『湖山樓詩集』、『枕山詩鈔』を獲る。率ひて七律四首を題す」四首中の三首目に、その明らかな痕跡を見ることが出来る。

不彫不琢絶浮華	彫ず	琢かず	浮華を絶す
秀骨天成蔑以加	秀骨	天成	以つて加うる蔑 <small>な</small> し
萬曆之間輕七子	萬曆の間	七子を輕 <small>かろ</small> んず	
乾隆以後數三家	乾隆以後	三家を數う	
徒摹格調氣應死	徒に	格調を摹せば	氣應に死ぬべし
能正性情詞乃葩	能く	性情を正せば	詞乃ち葩 <small>はなやか</small> なり
大雅遺音誰會得	大雅の遺音	誰か會得せん	
一言足蔽思無邪	一言	蔽ふに足る	思ひに邪無し

首聯において肯定的に述べられている「彫ず 琢かず」、「秀骨天成」が現れているような詩風と対比的に、領聯前半において否定的に扱われている「萬曆之間輕七子」の「萬曆」は、明の万曆年間（一五七三〜一六二〇）のことである。「七子」は、明の前七子の「文必秦漢 詩必盛唐（文は必ず秦漢、詩は必ず盛唐）」といった復古を唱えた文学的主張を継承した明の後七子、李攀竜・王世貞・徐中行・宗臣・梁有譽・吳国倫・謝榛のことである。（明の前七子は明の弘治・正徳年間（一四八八〜一五二一）に活躍した七人の文人、李夢陽・何景明・辺貢・徐禎卿・康海・王九思・王廷相である。）¹²

領聯後半「乾隆以後數三家」の「三家」は、袁枚・趙翼・蔣士銓という乾隆の三大大家のことを指している。清新さを目指し情のはたらきを重んずる性靈説の主唱者が肯定的に取り上げられてい

るのである。

頸聯前半「徒摹格調氣應死」の「格調」は、沈徳潜の詩派「格調派」のことを指している。沈徳潜（一六七三〜一七六九）は、袁枚たちと同じ乾隆時代の詩壇の重鎮であり、性靈派の袁枚に対し、表現の様式や言語的音調など「詩の形式的外面的要素を重視する」¹³格調説を唱えた。ここでは、五峰の格調派に対する否定的な考えが示され、同時に、後半「能く性情を正せば詞乃ち葩なり」では、格調派と対極的關係として存在している性靈派に対する肯定的な観点が表されている。

尾聯前半「大雅遺音誰會得」の「大雅」は『詩経』の一つの構成部分であり、尾聯後半は、孔子が『詩経』のあり方を述べた、「子曰、『詩』三百、一言以蔽之、曰思無邪」（子の曰く、『詩』三百、一言以てこれを蔽う、曰わく思い邪なし）¹⁴（『論語』爲政）とあるのを踏まえる。「思無邪」は邪心のない純粹な心のことである。このような孔子の詩に対する考え方に性靈説が結びついているという考えを、この詩から読み取れる。

この詩の原詩が明治一五（一八八二）年一月の『新文詩』第八八集に掲載されている。題名は「案上有春濤先生及枕湖二翁詩集率題四律亦瓣香私淑之意也（案上に春濤先生及び枕、湖二翁の詩集有り、率ひて四律を題す。亦、瓣香私淑の意なり。）」となっており、詩句にも多少違いがあるが、これに対する森槐南の評には「槐南曰、第三首、絶大眼孔、絶大議論。括盡一部隨園詩話。王漁洋・沈徳潜輩空架子。竟是架不成。枉惹人笑話。（槐南曰く、

第三首は絶大なる眼孔、絶大なる議論なり。一部の『隨園詩話』を括盡す。王漁洋・沈徳潜輩の空架子、竟に是れ架成らず。いたづらに人を惹きて笑話せしむ。）」とあり、袁枚の性靈説を要約し、王漁洋の神韻説・沈徳潜の格調説を批判したものとされている。

上記の五峰の詩においては「徒に格調を摹せば氣應に死ぬべし」として沈徳潜の格調説が否定されるのに対し、「能く性情を正せば詞乃ち葩なり」と、性情・性靈を強調する袁枚の性靈説が肯定されている。この詩からは、森春濤を通じての清詩の五峰への影響は、性靈説であったことが読み取ることができるのである。（明治一八（一八八五）年一二月に出版された『新瀉才人詩』第二集の水落鷗水詩「柳橋酒樓別水野櫻雨」¹⁵（柳橋酒樓にて水野櫻雨と別る））に対しての五峰の評に「五峯曰風調絶佳王新城流派（五峯曰く、風調絶佳、王新城の流派なり）」と王新城すなわち王士禎¹⁶の詩風、すなわち、神韻派の詩風が肯定的な形で言及されており、五峰は神韻派も肯定的に捉えていたようであるが、槐南の前詩に対する評では、五峰が神韻派の王士禎を否定的に捉えていたとしており、五峰と神韻派の関係については、別に追究したい。

二、五峰と張船山（一七六四〜一八一四）

ここでは、前述のように神田喜一郎が明治時代に「これを學んだり次韻したりしてゐる者が少くない」と指摘し、五峰が次韻し

た唯一の清詩である張船山の詩「佛前飲酒浩然有得」と五峰の詩を比較し、五峰の詩への張船山の影響を探ってみた。

『清史稿』¹⁷には張船山について次のように記述されている。

張問陶、字は仲冶、遂寧の人、大學士鵬翮の玄孫。詩名・書畫を以て亦た俱に勝る。乾隆五十五年進士。檢討改御史由り、復た吏部郎中に改めらる。出でて萊州府の知となる。上官の意に忤い、遂に病を乞う。吳・越に遊び、未だ幾もならずして、蘇州において卒す。始て袁枚を見るに、枚曰く、「老いて死せざる所以の者は、未だ君の詩を讀まざるを以てのみ。其の之を欽挹すること此の如し。著に船山集有り。」

（卷四八五列伝二七二文苑二）

また、胡伝淮による最新の『張問陶年譜』によれば、張船山の名は張問陶であり、四川省遂寧県の人である。大学士張鵬翮の玄孫であり、「詩人世家（詩人の代々の名門）」と言われるほどの家柄の持ち主である。詩を以って有名であっただけでなく、書畫にも優れていた。乾隆五五（一七九〇）年に進士となり、以後、翰林庶吉士、同檢討、江南道御史、吏部郎中を歴任した後、山東省萊州知府となるが、上官との関係が悪く、嘉慶一七（一八一二）年に、その職を辞し、蘇州に居を定めた。同一九（一八一四）年に、五一歳で没している。夙に詩名が高く、袁枚をして「老いて死せざる所以の者は、未だ君の詩を讀まざるを以てのみ。」と、張

船山に対する敬意を表さしめている¹⁸。近藤光男は、張船山の詩は「生氣に富み骨力もあって、袁枚をはじめ当時の諸名家とはまた異なった一境界をひらいた」¹⁹と評している。

清代の「神韻」、「格調」、「性靈」、「肌理」などの詩説の中で、最も影響力を示しているのは、復古を唱えた明の前後七子を批判する袁枚の「性靈」説であり、その詩風は『隨園詩話』に言う、「有性情而後真（性情有つて而して後真なり）」、「從性情而得者、如出水芙蓉、天然可愛（性情に従ひ而して得る者は、出水する芙蓉の如し、天然愛す可し）」というものである。例えば、袁枚の詩論に「作詩に我無かるべからず」という主張があるが、張船山の詩もそれと同じ観点を有している。張詩「論文八首」その七に、「詩中に我無ければ刪るに如ず」とあるように、詩中に「我」が無いような詩は削除したほうがいいとある。更に、「論詩十二絶句」その十に「宋を模し唐を規とするに徒に自ら苦しむ 古人已に死して争うを須いず」とあり、「題屠琴鳴論詩図」その三に「唐を規とし宋を模する 支持するに苦しむ 也た殘花の幾枝を放るるに似たり」とあるように、唐宋の詩を模範にするのに反対し、明の七子におけるような典故の堆積を批判している²⁰。しかし同時に、張船山自身は袁枚の性靈説を学んだことを否定している。自分の詩が袁枚に学んでいると言われ、彼は「頗る余の詩隨園に学ぶと謂う者有り、笑ひて此れに賦す」と題する詩二首を作つて反論した。曰く、「詩の成るは何ぞ必ずしも淵源を問わん 放筆剛に言はんと欲する所の如し 漢魏晉唐猶お學ばず 誰か能く意有りて

隨園に學ばん」、また、「諸君刻意三唐を祖とす 譜系分明として 墨數行 愧ず 我が性靈の終に是れ我なるを 李(白)杜(甫) にも成らず 張(籍)王(建)にも成らず」(21)。このように袁枚の「性靈」説の自身への影響を認めず、ただ性情を自由に発露することを求めた(22)。以上のように、張船山は、本人が袁枚から直接に影響を受けたことを認めないにもかかわらず、性靈説とほとんど一致している詩論を持っていると考えられている。そのため、張船山が袁枚から影響を受けたか否かにかかわらず、中国でも日本でも張船山は性靈詩派の詩人として認識されている。

次に、張船山の「佛前飲酒浩然有得」(『清廿四家詩』による)と題する七言律詩四首連作に注目し、その詩への五峰の次韻した七言律詩三首連作「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」と比較しながら、五峰と張船山との詩風の共通点と相違点を探ってみたい。

張船山詩「佛前飲酒浩然有得(仏前に酒を飲み、浩然として得る有り)」(23)の一首目

野鶴閑雲信所之	野鶴	閑雲	之く所に信す <small>まが</small>
百年随分強支持	百年	分に随い	強ひて支持す
地中人比骷髏少	地中の人	は骷髏に比して	少なし
眼底縁惟骨肉奇	眼底の縁	は惟だ骨肉のみ	奇なり
算我榮枯同草木	算するに我	が榮枯は草木に同じ	

勝他疑信亂ごう著龜 他的疑信して著龜に亂るに勝れり

夜深鬼問開天事 夜深くして 鬼は問ふ 開天の事

大醉搖頭笑不知 大醉して 頭を揺らし 笑ひて知らず

(野原に遊ぶ鶴や静かに空に浮ぶ雲は、赴くままに任せよう。

自分は一生涯を分に従って精一杯生きてゆくとしよう。世間に出た者でちゃんと墓地に埋葬されている人は、野ざらしになっている人より少ない。縁あるものうち本当に大事なものは骨肉の関係だけだ。占いにかけて私の榮枯は草木のように自然次第だと言われる。だがそれも他人のように占いの結果を信じたり疑ったりして心を乱すよりずっと良からう。深夜になると、鬼が天地開闢のことなど尋ねてくるが、しかし、私は大いに酒に酔ってしまい、頭を横に揺って、そんなことは知らないよと笑いながら答えるだけだ。)

この詩は庚戌(一七九〇)年、張船山が二七歳で進士になった後(24)の作だと推定される。詩題の中では仏教的な表現と道家的な表現が結合されている。「仏前」とは、仏様の前、仏壇の前という意味で当然仏教的であるが、その次に出ている「浩然」とは、ゆったりとして俗事から解放された屈託のない心境を表す(25)意味に使われる言葉であり、ここでは隠逸的傾向性を表す言葉と考えられる。「得る有り」は、『南史・隱逸傳上・陶潛』に「少來好書、偶愛閑靖、開卷有得、便欣然忘食(少來書を好み、偶ま閑靖を愛

す。開巻得る有れば、便ち欣然として食を忘れる」(26)とあるのを踏まえている。

鈴木虎雄は、袁枚の「性靈」詩説の概要に関して、「『性情の流露するにまかせて自由に述べ凡ての形式法則の束縛を受けず。古人の糟粕を嘗めずして清新機巧を以て之を行る、是を眞の詩とす』といふに歸す、其の説、之を『性靈』の説と稱す。蓋し性情の靈妙なる活用を貴ぶに取れり」(27)と指摘している。その特徴について、以下のような項目にまとめられている。

イ、詩は「性情」に本づくべし

ロ、詩には我あるを要す

ハ、詩はたゞ工拙を論ずべし

ニ、詩談數則

曰く意を主とし辭彩を奴とす。

曰く意は精深、語は平淡

曰く材料を消化すべし丸呑みにすべからず。

曰く典故を用ふる痕迹なきを要す、僻典は用ふべからず

曰く、寫景は易く言情は難し(28)

また、前述した張船山の詩風とともに、上記の張の詩を照らし合わせて見れば、確かに張は自身の(イ)「性情」に基づいて詠じているし、「性靈」詩説の(ロ)「我ある」の詩風や、張の主張した「詩中無我不如刪」、「寫出此身真閱歷」といった詩論を反映し

ていると思われる。具体的に見ると、詩の首聯後半「百年随分強支持」や頸聯前半「算我榮枯同草木」は、詩人の自身の真情(仕途に対する感慨)や経歴(元官吏の父親の失脚で、十五歳から、最低基準の生活さえも保障されいかなかったことなど、物心両面で大変苦労していた。ほぼ七年間の受験生活を過ごし、漸く進士に合格した)を基にして詠じている。「百年 分に随い 強ひて支持す」の「強ひて」には、自分の境遇に満足し切れていない心境が表わされており、「他の疑信して著龜に乱るに勝れり」の「勝れり」には、強いて運命に満足している自分のほうが、じたばたしている他人よりはましだと言う他人との比較による自己満足がある。本当には満足しきれないのを酒で紛らわすことにしているであろう。「大醉して 頭を揺らし 笑ひて知らず」の「笑」という字は、そのような詩人の屈折した気分を表していると思われる。

次に、五峰の次韻詩を検討しよう。五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」(29) (仏前に酒を飲み、浩然として得る有り。張船山の韻に次す) 其一

快事眼前寧過之

快事

眼前

寧いすくんぞ

之を過さん

蟹螯與酒手雙持

蟹螯と酒と

手に雙つながら持たん

自拚塵世緣皆吝

塵世を拚はらひて自り

縁

皆やぶさな吝かなり

不祭錢神癖亦奇

錢の神を祭らぬ

癖

亦た奇なり

我豈無情同木偶 我 豈に無情にして 木偶と同じからんや

人誰有意解金龜 人 誰か意有りて 金龜を解かん

謫仙落托長安市 謫仙 落托す 長安の市

未遇風流賀監知 未だ風流の賀監知に遇わず

(愉快な物事が目前にあるのにそれをほっておいていいものか。珍味としての蟹のはさみも酒も両手に持って味わおう。

この塵の世を払い落とそうとしてから人との縁は薄くなった。錢の神様に頭を下げない性向は世間では珍しい。しかし、この私にも人の心はあり、人形と同じではない。だれか賀知章のように金龜(高位の身分の者が着けた装身具)を酒に変えてともに楽しむ人がいないものか。「謫仙」と言われる李白が長安の町で落ちぶれている時に文雅な賀知章に会うことができたが、まだ私はそのような人に遇っていない。)

首聯の後半「蟹螯與酒手雙持」は、『晋書・畢卓伝』に「卓嘗謂人曰…得酒滿數百斛船、四時甘味置兩頭、右手持酒杯、左手持蟹螯、拍浮酒船中、便足了一生矣。」(酒を得て数百斛船に満たし、四時(春夏秋冬)甘味を両頭に置き、右手に酒杯を持ち、左手に蟹螯を持ち、酒船の中に拍浮すれば、便ち一生を了るに足る。)とあるのを踏まえている。

頷聯の後半「不祭錢神癖亦奇」は、清・鮑康『泉選』に「我料浪仙心鼓掌 詩篇不祭錢神」(我 浪仙(中唐詩人・賈島の字)

心に鼓掌すべきと料る 詩篇を祭らず 錢の神を祭る)とあるのに拠る。唐の馮贄の『雲仙雜記』に、「賈島は常に歳除を以て一年に得る所の詩を取り、祭るに酒脯を以てす。曰く、吾精神を勞り、是を以て之を補う、と」⁽³⁰⁾とある。五峰は世人の金の神様を祭る「塵世」とは一線を画している自分のありようを「奇」と意識しているのだろう。この五峰の自らを「奇」とする意識のありようは、張船山からの影響があると考えられる。王英志は張船山が特に「奇氣」を重視したことを強調しているが⁽³¹⁾、ここでは、森春濤が独自に編集した『清三家絶句』にある張船山の詩の中で以下のような「奇氣」を表している詩を見よう。

「醉後口占」⁽³²⁾ (乾隆五五(一七九〇)年、二七歳作)

錦衣玉帶雪中眠 錦衣 玉帶 雪中に眠る

醉後詩魂欲上天 醉後の詩魂 天に上らんと欲す

十二萬年無此樂 十二萬年⁽³³⁾ 此の樂しみ 無し

大呼前輩李青蓮 大呼す 前輩の李青蓮

(錦の衣服を着て、玉で飾った帯を身に付けて、酔っ払ったまま雪の中で眠る。酔っ払った後の詩心は天に上ろうとする。天地開闢以来、このような楽しいことは無い。先人・李青蓮(李白)を大きな声で呼んでみる。)

「奇氣」とは、詩人自らの非凡な氣質を忌憚なく發揮し、ほしのままに振舞う態度を指している。『張問陶年譜』によると、張は

二一歳から科擧の合格に努力し、父親の仕途上の変遷のため、いろいろな苦勞を経た後、二七歳のときに漸く進士に合格した。この詩作はちようど進士になったばかりの頃の作である。その六年間に父親の元赴任先・漢陽から京城までの往来、また、故郷・遂寧から京城までの往来をおよそ三回繰り返し、大変な苦勞をして功名を求めた。本詩の張船山は身分の高さを表す「錦衣玉帶」を身に付けているが、酒を飲んで酔っ払い、雪の中に寝てしまう。夢の中で彼の詩魂は天界まで上つてゆく。その空前の楽しみと喜びを、自分と同じように朝廷にありながら泥酔して詩を作った先人・李白を呼んで共に分かち合おうとする。宇宙開闢以来、このような喜びを知ったのは自分と李白だけだと豪語する詩である。このような「奇氣」の表現は、他の性靈詩派の詩人には見られない自己主張を含んでいる³⁴。五峰の「錢の神を祭らぬ癖 亦た奇なり」とする意識は、張船山の超俗的な「奇氣」と通ずるものがある。

第六、七、八句は、李白詩「對酒憶賀監二首 并序」の「序」に「太子賓客賀公、於長安紫極宮一見余、呼余爲謫仙人、因解金龜換酒爲樂、歿後對酒、悵然有懷、而作是詩。」（太子賓客賀公、長安の紫極宮に於いて余を一見し、余を呼んで「謫仙人」と為し、因つて金龜を解いて酒に換え樂みを為す。歿後に酒に對して、悵然として懐い有りて是詩を作る。）とあるのに拠る。

詩の内容は張船山の原詩との関連性が薄いし、詩の全体から見ても、原詩と必ずしも同じではない。張船山の場合はその首聯で

は、「野鶴閑雲」は自然に従うが、自分は与えられた分にしたがひ、人生を歩いていくと詠じ、その頷聯では、世の中では、骨肉の關係こそが重要な絆であることを確認している。その頸聯では、「算するに我が榮枯は草木に同じ」と自分の運命が自然とともにあることを歌っている。最後の尾聯では、酔中の夢の中で、鬼から天地開闢のことを聞かれたことに対して、そんな大層なことは知らないよと笑いながら答える。全体として、張船山のこの詩は、道家的表現の背後に不満を隠しつつ、自らに与えられた運命に対する諦念を詠じていると言えよう。

一方、五峰の場合は詩の首聯「快事眼前寧過之 蟹螯與酒手雙持」では、張の原詩と違い、真先に飲酒の場面を描いている。頷聯「自拚塵世緣皆吝 不祭錢神癖亦奇」は、自分が金銭に執着する俗世界と縁を切ってしまったて孤立していることを述べ、頸聯と尾聯では、自分を本當に知ってくれる人と邂逅していない嘆きを、「李白と賀知章」の「金龜換酒」のような典故を使つて連想させる形式を取っている。「我豈に無情にして木偶と同じからんや 誰か意有りて金龜を解かん 謫仙落托す長安の市 未だ風流の賀監知に遇わず」という議論の中には彼の風流世界への憧れが表現されているのである。恩師・森春濤から指摘された五峰の「天性議論家で詩にもなかく議論がある。かつ意志の強い人間であるからその作詩は剛健の氣を帯びて」³⁵いるとあるように、議論の上はその天性・真情・性情が表れていると思われる。張船山の詩には屈託した心境が表われているのに対し、五峰の詩にはそのよう

な屈託が感じられない。

張船山詩「佛前飲酒浩然有得」の二首目

虚舟随意触蓬萊 虚舟 随意に 蓬萊に触る

此豈乘風破浪来 此れ豈に風に乗じ浪を破りて来るならんや

天若有情猶識我 天 若し情有らば 猶ほ我を識る

人如無命不須才 人 如し命無くんば才を須ひず

誰傳死後詩千首 誰か傳へん 死後 詩千首

莫放生前酒一杯 放す莫かれ 生前 酒一杯

懶向嬋嬋驚臥犬 嬋嬋に向かひて 臥犬を驚かすに懶しものう

陶然沈醉亂書堆 陶然 沈醉 亂書堆うずたかし

(無人の船のような恬淡虚心たる心境にあれば、行こうと思えばいつでも蓬萊に行き着くことができる。それは決して風に乗る、荒波を乗り越えて行くというようなものではない。天に若し情があれば、私を知って出世させるだろう。自分にもしそのような運がなければ、才能を用いることなく野に居るだけのこと。誰か死後自分の千首の詩を後世に伝えてくれるものがあるだろうか。むしろ生きている間は一杯の酒を手放さずにいるほうがいい。奇書をもとめて天帝の書庫がある所に行き、寝ている番犬をわざわざ起こすことはない。いい気持ちに酔っ払って、乱雑に積み上げた書物の中に埋もれて

いるほうがいい。)

首聯の前半「虚舟随意触蓬萊」は、『莊子・山木』に「方舟而濟於河、有虚船來觸舟、雖有偏心之人、不怒。(舟を方べて河を濟るに、虚船来りて舟に触るる有れば、偏心の人有りと雖ども怒らず。)」とあるのを踏まえている。恬淡虚心たる心境の比喩として用いている。その後半「乘風破浪」は、『宋書』「列伝凡六十卷 卷七六 列伝第三六 宗愨」に「愨年少時、炳問其志。愨曰：「願乘長風破萬里浪。」(愨年少の時、炳其の志を問ふ。愨曰く「願長風に乗じ万里の浪を破らん」と。))とあるのに拠る。

頸聯「誰傳死後詩千首 莫放生前酒一杯」は、杜甫詩「不見(原注：近無李白消息)」に「敏捷詩千首 飄零酒一杯」とあるのに拠る。

尾聯の後半の「陶然沈醉亂書堆」の「陶然」は、陶淵明の詩『時運』の「揮茲一觴、陶然自樂」という用語に拠る。

この二首目の張船山の詩は一首目と同じく、進士になった後、翰林の庶吉士³⁶に選ばれた時期の作である。翰林院で様々な知識を学んでから各種の職を授かるという時期になるわけである。首聯「虚舟随意触蓬萊 此豈乘風破浪来」と頌聯「天若有情猶識我 人如無命不須才」からは、張船山が当時の六年間の浪人生活を辛抱し、抱負を抱いて科挙にやつと合格し、翰林院に選ばれたけれども、実際、翰林院に入ると、その才を発揮することができないという実態を経験した時の、その登竜門前後の格差の大きさに対

する不満や失望などの心境が読み取れる。そのため、頸聯「誰傳死後詩千首 莫放生前酒一杯」と尾聯「懶向嬾驚臥犬 陶然沈醉亂書堆」において、その才を發揮できないことから妥協的な態度を取ることになったことがうかがえる。首聯の前半の「虚舟」によって、道家的な「無為自然」を表面的には装っているが、内心の屈託を「沈酔」のなかに紛らしているのが感じられる。張の「論文八首」（『船山詩草』卷九）に「詩中無我不如刪」、「論詩十二絶句」（『船山詩草』卷一一）に「寫出此身真閱歷」と主張しているように、「有我之境」を表現する詩であると思われる。

五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」其二

百年賤辱老蒿萊 百年の賤辱 老蒿萊

面目唯能保本來 面目 唯だ能く本来を保つ

舉世驚猜真怪物 舉世 驚き猜う 真の怪物かと

受人憐惜豈奇才 人に憐惜を受くるは 豈に奇才ならんや

禪追蘇晋逃于酒 禪は蘇晋を迫いて酒に逃げ

詩仿長江祭以杯 詩は長江に仿いて祭るに杯を以てす

債鬼滿前齊叩首 債鬼 前に満ちてみな叩首す

先生笑坐亂書堆 先生 笑ひて坐る 乱書の堆

（一生涯低い身分のまま偏僻なところで年取ったが、本来の面目だけは保つことができた。世の中の人は皆驚いて本物の怪物かと疑った。しかし人から憐み惜しまれるのは、決して

奇才の持ち主とは言えないだろう。「禪」は、蘇晋のように酒に逃れ入り、「詩」は、賈島のように酒杯を以って祭ろう。債鬼たちはみな目の前で頭を地につけて借金を払ってくれと押むだろうが、当の先生は笑いながら散乱している本の山の中に坐っているだけ。）

第一句の「百年賤辱老蒿萊」の「百年」は、張船山の原詩一首目にある「百年随分強支持」の「百年」と同じく、大体「百年」を以って、自分の生涯に例えているのだろう。その後の異なる結語によって、それぞれの心境も表している。五峰の場合は身分が低いことについて触れているのに対し、張船山のほうはその生涯をどのように生きていくかという人生を直視する態度を表している。

第二句は、「本来の面目」という禅語を用いている。『六祖壇経・行由品』には「不思議、不思議、正與麼時、那箇是明上本来面目」とあり、また、『正法眼蔵』（辨道話）に「大解脱地を証し、本来の面目を現ずるとき」とある。「本来の面目」は「各人が本来備えているありのままの姿」を言う。

この首聯二句をまとめてみると、張船山は「虚舟随意触蓬萊」のように目的を持たずに運命に任せ、自分の人生を歩んでいくと覚悟している（悟る）のに対し、五峰は人生の中で、老蒿萊のように様々な賤辱の経験を経たとしても、本来の面目だけは頑固に保つてゆくことを考えている。つまり、張船山は受動的に己を天

に任せようとするのに対し、五峰のほうは能動的に本来の己の姿を維持しようと考えているのである。

第五句³⁷は、杜甫詩「飲中八仙歌」に「蘇晋長齋繡佛前（蘇晋は長齋す繡佛の前）醉中往往愛逃禪（醉中往往にして逃禪を愛す）」とあるのを踏まえている。

第六句は、中唐詩人・賈島³⁸（七七九〜八四三）長江県（今の四川省）の主簿となつたところから「賈長江」と言われる。先に言及したように、『雲仙雜記』に「賈島は常に歳除を以て一年に得る所の詩を取り、祭るに酒脯を以てす」³⁹とあるのに拠る。

第七句「債鬼満前齊叩首」の「債鬼」は、借金・掛金の返済を強く催促する人の意味であるが、五峰の実際の生活状況を反映しているわけではない。

第八句「先生笑坐亂書堆」は、張船山原詩の「陶然沈醉亂書堆」の韻に従い、詠じているが、張の「陶然沈醉」を「先生笑坐」に変じ、前句と関連して、五峰の債鬼を齒牙にもかけない悠然たる態度を表している。

張船山の原詩二首目の頸聯「誰傳死後詩千首 莫放生前酒一杯」では、「詩」と「酒」というように対になっているのに対して、五峰の二首目の頸聯では「禪追蘇晋逃于酒 詩仿長江祭以杯」とあるように「禪」と「詩」とが対となっているが、この両者が酒によつて結びついているのである。拙稿「漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―」では、それについて、五峰の「禪」は、「禪」それ自体を求めているというよりも、詩を創作す

る境地への希求であると結論付けた⁴⁰。それは「神韻」説を唱えている王士禎の「嚴滄浪禪を以て詩に喩う、余深く其説を契す」、「筏を捨て岸に登る、禪家は以て悟境と爲す、詩家は以て化境と爲す、詩禪一致、等しく差別無し」（『帶經堂詩話』の卷三・微喩類）という説に一致している。

五峰本詩の詩風は、一首目と同じく、「逃禪」の蘇晋や「祭詩」の賈島などの典拠を取り入れ、自分の人生の本質を失わないことや、世の中から「怪物」や「奇才」などと言われても、自分の本来の在り方を変えず、泰然たる姿勢を保つことを描くことの中に現れている。五峰の意志の強さや剛健な気風が感じられる。張船山の詩に見られるような鬱屈した鬱悶気はない。

張船山詩「佛前飲酒浩然有得」の四首目

便将奇壽敵鴻荒	便 <small>たと</small> へ	奇き壽を將て	鴻荒に敵すも
轉眼終須到北邙	轉眼	終に須らく北邙に到るべし	
佛老看空聊縱酒	佛老	空を看て	聊か酒を縦にす
海天遊遍且思鄉	海天	遊遍して	且つ 郷を思ふ
竟逢知己何妨死	竟に知己に逢はば	何ぞ死を妨げん	
未遇傾城不肯狂	未だ傾城に遇はざれば	狂 <small>がまん</small> を肯ぜず	
夢蹈翠虛陪上帝	夢に	翠虚を蹈み	上帝に陪ふ
笑看傀儡競登場	笑ひ看る	傀儡の	競ひて登場するを

（たとえ珍しいほどの長寿によって、人は死ぬという太古からの習いに抵抗しようとしても、結局、最後は墓場に行く。

お釈迦様と老子とは、すべてが空であるという真理を見抜いて、心行くまで痛飲している。海と天の果てまで回って遊覧していても、死という帰るべき郷里のことが思われる。自分のことをよく分かってくれる人に出会ったら、死んでもいい。いまだに城を傾けるような美人と会っていないので、狂っていないだけのことである。しかし、夢の中では、すでに天空に登って、天の神様に付き添い、人形どもが登場しようとするのを笑いながら見ている。）

張船山の原詩四首目では、人間がいくらこの世でじたばたと長生きしても、結局は墓場に行くのだという宿命感と諦念を語っている。仏教や道家的な思想が酒と結び付けられているのは、五峰の前詩に通じ、また、知己に会ったら、死んでも構わないというのは五峰詩の「未だ風流の賀監知に遇わず」に通じているであろう。尾聯後半「笑看傀儡競登場」からは、張船山の官海を遊せする時に、上役に阿諛迎合する人たちに対する諷刺が読み取れる。当時、乾隆時代の後期から、奸臣和珅が乾隆帝の寵愛を一身に集め、収賄などで政治を壟断していた。そのため、大志を抱いて、朝廷に貢献しようと思う秀才たちは才能を發揮できなかった。張船山のこの詩も、当時の朝廷に蔓延している腐敗現象に逆らうこともできず、阿諛迎合して時流に投ずることもできない無力感を

表していると考えられる。「笑ひ看る」とはあるが、それは苦い笑いであろう。

五峰詩「佛前飲酒浩然有得次張船山韻」其三

人生人死自鴻荒	人の生れ	人の死するは	鴻荒 <small>よ</small> 自りす
萬古銷沈向北邙	万古	銷沈して	北邙に向かう
誰遣我來爲過客	誰か我を遣わして	来たりて	過客 <small>わら</small> しむ
直須命盡始還鄉	直ちに須らく命尽きて	始めて	還郷すべし
與其將法點頭聽	其の法を點頭して	聴かんよりは	
孰若把杯披髮狂	杯を取りて	披髮して	狂ふにいずれぞ
一笑眞禪能解脱	一笑	眞禪	能く解脱す
不妨遊戲醉千場	遊戲して	千場に酔うを	妨げず

（人の生死は大昔から自然のまま。死ぬ時が来れば、消沈して、墓場に向かう。誰か私をこの世に旅人として送り込んだのか。運命が尽きればいずれは故郷に帰るように死ぬだろう。説法なぞ聞いてわかったふりをして鎮くよりは、寧ろ杯を取り、髪を振り乱して狂酔したほうがよい。ただ一笑するだけで真の禪は現世の苦惱から解放してくれる。だから遊び戯れて千回酔っても構わないのだ。）

第二句にある「萬古」は、死ぬことの曖昧な表現として使われている。「北邙」は、北邙山のことである。中国河南省洛陽の北方

にある丘陵の総称である。漢・魏・晋・唐の歴代皇帝陵などが多くあったことにちなんで、「北邙」は墓場の意味として使われている。杜牧七絶「登樂遊原」に「長空澹澹として孤鳥没す 萬古銷沈して此中に向う」とあるのを踏まえる。

第三句にある「過客」は、李白詩「擬古十二首」其九に「生者過客為り」とあるのを踏まえ、第四句の「帰郷」は同「死者歸人為り」を踏まえている。

第七、八句は、徐鉉（九一六〜九九一）詩「抛毬樂辭二首」の其一に「一笑千場醉う 浮生白頭に任す」とあるのを踏まえている。

五峰はこの詩を通して次のように言う。生死は運命であり、人間の力で左右できないものである。知らないうちに自分は運命の中の一人の過客となっていて、命運が尽きれば帰郷するように死んでしまう。静かに説経を聴いて、分かったふりをしているよりは、思う存分酒を飲むほうがよっぽどいい。真の禅とは一笑するだけで悟ることができて、苦悩から解放されるものだ。酔っ払って遊んで暮らして構わないのだ。

本詩は前二首と変わらず、杜牧や李白などの典拠を取り入れ、人間の生死や運命などを議論しつつ、五峰の豪放磊落な気概を表現していると同時に「其の法を点頭して聴かんよりは 杯を取りて披髪して狂ふにいずれぞ」と詠じているように、従来の束縛からの自由を求める心情を豪胆に吐露している。更に、前掲した張船山詩「酔後口占」の「奇氣」のような詩風を呈していると思われるし、特に尾聯「一笑眞禪能解脱 不妨遊戲醉千場」は俗世界

から風流世界への解放・憧憬を表し、張船山原詩に見られる道家的な傾向もうかがえる。

結びにかえて

五峰が清詩を知るに至ったのは、その知人の証言、および、『五峰遺稿』の詩の配置から考えて、森春濤の弟子・山中耕雲や森春濤本人との接触を通してであったと考えられる。そこから張船山の詩を知るようになり、その影響を受けたと考えられるが、今回、取り上げた張船山詩と五峰のそれへの次韻詩を見れば、張船山の五峰への影響は限定的であり、内容や用語に共通する面はあるが、詩風・詩境においては、必ずしも同一ではないことが判明する。

自らを「奇」と意識することについては、五峰は張船山の「奇氣」の影響を受けた事が考えられる。張船山の原詩三首は、表面的には道家的な無為自然・任天という心境を表現している超俗的であり、その点から見れば、張船山は五峰⁴¹と同じ好尚を持つており、五峰にとつては、少なくとも表面的には、最も受け入れやすい清代の詩人であっただろう。その詩は、「じたばたせず運命に随順してゆこうとする心境を詠じる。諦観と言っても良いような穏やかさがそこにはある」⁴²と評されるような表現を用いているが、しかし、その背後には鬱屈した心情が隠されている。それに対して、五峰の次韻詩には、張船山の原詩に見られるような鬱屈は感じられず、あくまでも剛健で磊落である。五峰の一首

目は自分の数奇な運命を嘆いてはいても、風流世界の知己に邂逅するのを期待する気持ちを表している。五峰の二首目は「本来の面目」という禅語を用い、何があっても、自分自身の本来のあり方は変えないという強い精神力と樂觀的な考え方を呈している。五峰の三首目は張船山に倣って、人間の生死は免れがたい運命であるという見方を示しつつも、飲酒によって「禪」の奥義を悟る道に導かれるのだという逆説を豪胆に吐露している。前二首では、それぞれ「李白と賀知章」の「金龜換酒」という典故、「逃禪」の蘇晋や「祭詩」の賈島などの典故を取り入れ、人生や運命などを議論した。三首目では、李白の「擬古十二首」其九「生者為過客死者為歸人」とあるのを踏まえ、人間の生死や運命などを論じている。これらの詩には、森春濤から「天性議論家で詩にもなかく議論がある。かつ意志の強い人間であるからその作詩は剛健の氣を帯びてゐる」⁴³と指摘されているような特色が現れているが、張船山におけるような心情の屈折は表れていない。そこに両者の相違が見られる。

〔注〕

- (1) 水津有理「明治期における清詩受容について―同時代の文学として」『対話と深化』の次世代女性リーダーの育成「魅力ある大学院教育」イニシアティブ平成一八年度活動報告書（海外研修事業編）二〇〇七年三月二八六～二八九頁。また、長澤規矩也著「長澤孝三編『和刻本漢籍分類目録 増補補正版』汲古書院 二〇〇六年を参照。
- (2) 神田喜一郎『神田喜一郎全集』第八卷 同朋社 一九八七年 一六

三頁～一六四頁その初出は一九六七年に集英社から発行された漢詩大系22『清詩選』の「月報」である。

- (3) 『清廿四家詩』と『清三家絶句』に関する先行文献は以下のものを参考にした。日野俊彦『清廿四家詩』について『成蹊國文』第四三二号二〇一〇年三月 一三二～一四〇頁。新井洋子「森春濤編『清三家絶句』について」『二松』第一九集 二〇〇五年 二五三～二七六頁。
- (4) 今關天彭「森春濤（下）」『雅友』第三六号 一九五八年四月 二〇頁。
- (5) 揖斐高「明治漢詩の出發―森春濤試論（特集 明治十年代の江戸）」『江戸文学』卷二一 一九九九年二月 一五～一六頁。また、揖斐高「森春濤小論」『漢詩文集・新日本古典文学大系 明治編2』岩波書店 二〇〇四年 四三七頁。以下のように分析してある。「竹枝というのは、男女間の艶情を交えつつ、その土地の風景や風俗を詠む抒情的風俗詩とでもいうべき詩体であるが、『春濤詩鈔』巻頭に置かれる、春濤十五歳の天保四年に詠まれた「岐阜竹枝二首」以来、春濤はその生涯にわたって竹枝を詠み続けた。そもそも、医師修業の当初、春濤が男女の哀情を主題にすることが多い浄瑠璃に耽溺したという伝記的な事実と、春濤の漢詩の初作が竹枝であったということは無縁ではない。おそらく、この両者に共通する艶治哀切な情趣への嗜好は、春濤生来の性向によるものであったと見るべきであろう。」
- (6) 孟慶遠主編 小島晋治 立間祥介 丸山松幸訳『中国歴史文化事典』新潮社 二〇〇〇年 六九五頁。また、中津濱涉「劉禹錫の（竹枝詞）について」『新国語研究』第一七号 一九七三年を参照すると、中唐の詩人である劉禹錫（七七二～八四二）が「永貞の政変」で政争に敗れ、長い流謫の生活を余儀なくされ、僻遠の地朗州（湖南省常德県・連州（広東省連県）・夔州（四川省奉節県）に左遷された。特に、「建平」という唐の巫山県（夔州に属する）に在った時、その地に竹枝と呼ばれる民歌を聴き、その土地の人の代りに新しい竹枝九首を七言絶句の形式として詠んだり、白居易と唱和したりして、その作は大変有名になり、民間の人々から伝わってきた。民間歌謡が劉禹錫の手で加筆され広がり、後の文人墨客から注目されるまでに至った。
- (7) 揖斐高「江戸詩歌論」『第二部 江戸漢詩の諸相』の「第三章 竹枝の時代―江戸後期の風俗詩―」汲古書院 二〇〇一年 一五三～一八二頁を参照。
- (8) 王士禎の号は阮亭・漁洋山人である。
- (9) 揖斐高「森春濤小論」『新日本古典文学大系 明治編2 漢詩文集』

- 岩波書店 二〇〇四年 四三九頁。
- (10) 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九二九年 二五〇二八頁。
- (11) 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九二九年 五峰追回録「その家計・その詩」二四三頁。
- (12) 蔣祖怡 陳志椿主編『中国詩話辞典』北京出版社 一九九六年 七二六～七二八頁。
- (13) 近藤光男『漢詩選14 清詩選』集英社 一九九七年 二六頁。
- (14) 金谷治訳注『論語』岩波書店 一九九一年 一七頁を参照。大意は、先生がいわれた、「詩経の三百篇、ただ一言で包みこめば、『心の思いに邪なし。』だ。」
- (15) 小林二郎編纂『新鴻才人詩』第二集 一八八五年 八丁ウ。
- (16) 王士禎は山東省新城の出身であり、王新城と呼ばれている。
- (17) 趙爾巽等撰『清史稿』第四四冊 中華書局 一九七六年～一九七七年 一三三八四頁。
- (18) 胡伝准『張問陶年譜』巴蜀書社 二〇〇五年 三〇頁と「年譜」。
- (19) 近藤光男『漢詩選14 清詩選』集英社 一九九七年 三二五頁。
- (20) 王英志『中国古代文学流派研究叢書 性靈派研究』遼寧大学出版社 一九九八年 三〇九～三三〇頁。
- 嚴迪昌『清詩史』上、下 五南圖書出版有限公司 一九九八年 「第七章 乾嘉詩人譜(下)」第四節 「性靈」後勁張問陶「九二六～九三四頁。
- 張問陶『船山詩草』中華書局 一九八六年 二～三頁などを参照。
- (21) 王運熙、顧易生主編『中國文學批評通史』清代卷 上海古籍出版社 二〇〇七年 五二二頁。
- (22) 王運熙、顧易生主編『中國文學批評通史』清代卷 上海古籍出版社 二〇〇七年 五二二頁。
- (23) 張問陶『船山詩草』中華書局 一九八六年。「佛前飲酒浩然有得」は『船山詩草』巻五に収録されている。『船山詩草』の出版説明によれば、巻一を除き、巻二から巻二〇まで、編年体で編集されている。
- (24) 『船山詩草』巻四「有感」の自注に「予殿試名居最後。」とあるのに拠る。
- (25) 新村出『広辞苑』第五版 岩波書店 一九九八年 九〇四頁を参照。
- (26) 『南史』列伝凡七十巻 巻七十五 列伝第六十五 隱逸上 陶潛 一八五九頁。
- (27) 鈴木虎雄『支那詩論史』弘文堂書房 一九二五年 二二一頁。
- (28) 鈴木虎雄『支那詩論史』弘文堂書房 一九二五年 二一六～二二〇頁
- (29) 阪口猷吉編輯兼発行『五峰遺稿(上)』日清印刷株式会社 一九二五年 一五丁オウ。
- (30) 唐 馮贇撰『雲仙雜記』(四部叢刊統編子部) 巻四 「祭詩以酒脯」上海書店 一九八四年。
- (31) 王英志『中国古代文学流派研究叢書 性靈派研究』遼寧大学出版社 一九九八年 三一三～三一七頁。
- (32) 森春濤編『清三家絶句』茉莉詩店開雕 一八七八年 巻一 二丁ウ。
- (33) 袁枚『子不語』巻五「奉行初次盤古城案」に「王曰天地無始無終。有十二萬年。便有一盤古。」とあるのを踏まえる。
- (34) 王英志『中国古代文学流派研究叢書 性靈派研究』遼寧大学出版社 一九九八年 三一六～三一七頁。
- (35) 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新潟新聞社 一九二九年 三〇～三一頁。「五峰・阪口仁一郎小傳」の「三、青年時代」の「田邊碧堂氏談」による。
- (36) 諸橋轍次『大漢和辞典』修訂第二版 巻四 大修館書店 一九九六年 五八一頁を参照。庶吉士(しよきつし)は「官名。明の太祖、書經立政の庶常吉士の義に則って庶吉士を置く。始め各署に分設したが、永樂中、翰林院に專屬し、進士の文學に優れた者、及び書を善くする者を以て之に任ず。清、之に因って庶常館を置き、翰林官を以て教習とし、三年間修養せしめた後、試験を経て職を授く。之を散館といふ。」
- (37) 拙稿『漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―』『現代社会文化研究』第五五号 二〇一二年一月では、本詩の第五、六句を取り上げたので、ここでは、より詳細な注及び分析をしたことをお断りしておく。
- (38) 賈島は「僧推月下門」の句を得たが、「推」を改めて「敲」にしよかと迷って韓愈に問い、「敲」の字に決めたという故事で有名である。
- (39) 唐 馮贇撰『雲仙雜記』(四部叢刊統編子部) 巻四 「祭詩以酒脯」上海書店 一九八四年。
- (40) 拙稿『漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―』『現代社会文化研究』第五五号 二〇一二年二月 二五頁。
- (41) 拙稿『漢詩人としての阪口五峰―「禪」に関する詩句を中心に―』『現代社会文化研究』第五五号 二〇一二年二月 二九～三〇頁を参考にしていただきたい。五峰詩「梅花丈室歌」では道家的な表現が使われている。その一方、張船山の『船山詩草』巻二に「榜櫟」と題

する七言律詩がある。この後の三首目は「蟋蟀吟秋燕飛二首」がある。その引にあたる文章の中では、『南華』に言及し、「蟋蟀吟」に「渾沌鑿死三萬秋」とある。張船山一九歳の作詩であるため、早くから道家的な影響を受けているのうかがえる。

(42) 福井辰彦「宮崎晴瀾と張船山―明治漢詩における清詩受容の一斑―」『国語国文』第七一卷 第四号 二〇〇二年四月 九頁。

(43) 阪口猷吉編輯『五峰餘影』新瀉新聞社 一九二九年 三〇―三一頁。
「五峰・阪口仁一郎小傳」の「三、青年時代」の「田邊碧堂氏談」による。

主指導教員（佐々木充教授）、副指導教員（廣部俊也准教授・岡村浩准教授）